



134

中学生向け

年組

(2022年10月24日付・下野新聞3面)

競技体験理解深める

廊下が簡易コートだ。児童が白いジャックボール(目標球)目がけ手のひらのボールを次々転がす。そばにビタリ。敵味方関係なく歓声が上がった。

17日午後、小山城東小。4月に発足したボッチャクラブには、学年や国籍の違う約20人が所属する。ボッチャは、重い脳性まひや四肢に障害がある人ができるスポーツとして考案された。児童は競技に親しみ、福祉の考え方を学ぶ。

顧問の渡辺まり絵教諭(36)は「個性が異なっても工夫すれば同じ土台で楽しめる」と肌で教えて

共生社会



ボッチャを楽しむ小山城東小の児童＝17日午後、小山市城東1丁目

くれる」。障スポは、障害の有無問わず誰もが活躍できる「共生社会」の実現を掲げる。昨年のパラリンピック東京大会でも強調された言葉で、県内各市

町で東京大会に向けパラリンピアンを招いた講演会や授業などが展開された。

「共生社会ホストタウン」に県内で唯一登録されている那須塩原市は、2020年夏から始まったオーストリアのパラリンピアンと市内小中学生のオンライン交流会を東京大会以降も継続。すでに30回を超えた。

同市市民協働推進課の宇都野淳さん(64)は「障害者目線で物事を考える力が子どもたちに付いてきている」と成果を感じている。障スポスポーツの教育的意義が浸透する一方、今回の障スポ自体の認知度は伸び悩む。21年5、6月に実施した県政世論調査では、障スポの本県開催を知らない層が6割を超えていた。

県担当者は「障害者スポーツに親しむには体験するのが一番だが、コロナ禍でイベントをやりきれなかった」と残念がる。今大会に向け、どこまで挽回できたかは未知数だ。

知的障害者のスポーツ活動を支援するNPO法人「スペシャルオリンピックス日本・栃木」事務局長の原田久美子さん(61)は、共生社会について「言葉だけが先行している。障害者への差別や偏見は世間にまだまだある」と言及する。内閣府によると、国民の約7・6%が何らかの障害を有する。「周囲にいるんですよ」。身近な障害者の存在に目を向けることが改善の一步になると訴える。

本県選手団298人を含め、障スポには全国から人々が集う。共生社会への理想を未来につなぐ場になれるか。「県民参加」が求められている。(この企画は佐野恵、斎藤愛が担当しました)

県民参加で理想実現へ

設問

【1】本文中で使われている次のことばの読み方を答えてください。

①簡易 ②発足 ③浸透 ④挽回

【2】障スポとは「全国障害者スポーツ大会」の略称ですが、記事ではこの障スポの理念として4字のことばを挙げています。その4字のことばを探してみましょう。

【3】障害者スポーツの教育的意義として、子どもたちにどのような力がついてきていると記事では伝えていますか。

【4】この記事から分かる情報として正しいものには○を、間違っ

いるものには×を書きましょう。

- ア ボッチャは、障害の有無や個性の差にかかわらず、同じ土台でたのしめるよう工夫されたスポーツである。
- イ 栃木県内に「共生社会ホストタウン」は、那須塩原市以外にない。
- ウ 那須塩原市は、パラリンピアンと市内小中学生のオンライン交流会を何度も実施しており、その回数は東京パラリンピックまで30回を超えた。
- エ 障スポが栃木県で開催されることを知っている人の割合は4割に届いておらず、それにはコロナ禍も関係していると県の担当者は考えている。
- オ 身近な障害者の存在に目を向けることが、彼らへの差別や偏見を改善する一歩になると内閣府は伝えている。
- カ 記事では、障害の有無を問わず誰もが活躍できる社会を実現するために、障スポへの県民参加が必要であると訴えている。